

第28回夏期福音特別集会(2)(梅ヶ島)

歓喜の油

――イザヤ書第61章、62章――

1981年8月22日

小池辰雄

キリストの御霊われに臨めり 霊が貧しい キリストの碎けを賜る 愛への自由 歓喜の油
神さまを楽しむ 女性道即男性道 「汝はわが骨の骨、わが肉の肉」 心臓が太陽となれ 歓喜
の内容は聖霊 汝の御意にこれ従う

【イザヤ61】

1 主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、^{とらわれびと}俘囚にゆるしをつげ縛められたるものに解放をつげ、^{ときはなち}2 エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀むものをなぐさめ、^{かなし}3 灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀にかえ、^{かなしみ}歓喜のあぶらを予え、^{あた}うれいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹、エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。^{すた}4 彼等はひさしく荒れたる処をつくろい上古より廃れたる処をおこし荒れたる邑々をかさねて新たにし世々すたれたる処をふたたび建つべし。^{いにしえ}5 外人はたちてなんじらの群をかい、^{あだしびと}異邦人はなんじらの畑をたがやす者となり葡萄をつくる者とならん。^{しとくにびと}6 然どなんじらはエホバの祭司となえられ、われらの神の役者とよばれ、もろもろの国の富をくらい、かれらの栄をえて自らほこるべし。^{つかえびと}7 曩にうけし恥にかえ倍して賞賜をうけ、^{たまもの}凌辱にかえ嗣業をえて楽しむべし。而してその地にありて倍したる賞賜をたち、^{はすかしめ}永遠によるこびを得ん。^{たまもの}8 われエホバは公平をこのみ邪曲なるかすめごとをにくみ、^{まこと}真実をもて彼等にむくいをあたえ、^{よこしま}彼等ととしえの契約をたつべければなり。^{まこと}9 かれらの裔はもろもろの国のなかに知られ、^{すえ}かれらの子輩はもろもろの民のなかに知られん。^{わきま}すべてこれを見るものはそのエホバの祝したまえる裔なるを弁うべし。

10 われエホバを大いによろこび、わが靈魂はわが神をたのしまん。そは我にすくい^{たましひ}の衣をきせ義の外服をまとわせて、^{にいむこ}新郎が冠をいただき新婦が玉こがねの飾りをつくるが如くなしたまえばなり。^{にいよめ}11 地は芽をいだし畑はまける



ものを生ずるがごとく主エホバは義と誉れとをもろもろの国のまゑに生ぜしめ給うべし。

【イザヤ62】

1 われシオンの義あき日の光輝のごとくにいで、エルサレムの救いもゆる松火のごとくになるまではシオンのために黙さずエルサレムのために休まざるべし。2 もろもろの国はなんじの義を見、もろもろの王はみななんじの榮えをみん。斯てなんじはエホバの口にて定め給う新しき名をもて称えらるべし。3 また汝はうるわしき冠のごとくエホバの手にあり。王の冕のごとくなんじの神のたなごころにあらん。4 人ふたび汝をすてられたる者といわず、再びなんじの地をあれたる者といわじ。却てなんじをへフジバ(わが悦ぶところ)となえ、なんじの地をべウラ(配偶)となうべし。そはエホバなんじをよろこびたもう。なんじの地は配偶をえん。5 わかきものの処女をめとる如くなんじの子輩はなんじを娶らん。新郎の新婦をよろこぶごときなんじの神なんじを喜びたもうべし。

6 エルサレムよなんじの石垣のうゑに斥候をおきて終日終夜たえず黙すことなからしむ。なんじらエホバに記念したまわんことを求むるものよ、自らやすむなかれ。7 エホバ、エルサレムをたてて全地に誉れをえしめ給うまでは息め奉るなかれ。8 エホバその右手をさしその大能の臂をさし誓いて宣給く、われ再びなんじの五穀をなんじの敵にあたえて食わせず、異邦人はなんじが労したる酒をのまざるべし。9 收穫せしものは之をくらいてエホバを讃たたえ葡萄をあつめし者はわが聖所の庭にて之をのむべし。

10 門より進みゆけ、民の途をそなえ土をもりて大路をもうけよ。石をとり のぞけ、もろもろの民に旗をあげて示せ。11 エホバ地の極にまで告げてのたまわく、汝等シオンの女にいえ、視よなんじの救いきたる。視よ主の手にその恩賜あり、はたらきの価はその前にあり。12 而してかれらはきよき民またエホバにあがなわれたる者となえられん。なんじは人にもとめ尋ねらるるもの棄てられざる邑となえらるべし。

●キリストの御霊われに臨めり

1 主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、

俘囚にゆるしをつげ縛められたるものに解放をつげ、

これはキリストがルカ伝(4・18、19)に引用された所です。61章の最初の数節は「エホバの僕の歌」の続きといつてもいいような内容です。



「主エホバの霊われに臨めり」

とある。ふるわれて、「遺^{のこ}れる民」にあなた方は今なりつつあるわけです。呼ばれる者は多い。けれども、本当にその中から遺る人は少ない。

「終りまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

といいますが、マラソン競争でもそうです。勝つことも結構ですが、最後になっても走りぬくことが大切です。人生はマラソンですが、あなた方は人生のマラソンにおいて終りまで走りぬけば、これは天国に入る。途中で止めてしまったら、これはちよつと困る。人生をマラソン競争と思つて、終りまで走りぬく。そして、倒れたのがいれば、それを担いで一緒に走るくらいの底力をもつたら、それはもう本ものです。

私は明治の人間ですから、信義を貫く魂の姿勢が非常に好きです。偉大な魂がたくさんいますから、日本の歴史を読みなおして、

「ああ、こういう先輩がいたか」

と驚く。そういう意味で、歴史を本当に自分の中に生かさなければダメです。現代の日本人は過去の日本に対する責任を持つている。また、未来の日本に対する課題を持つている。あなた方は、そういう存在である。この頃、そういう責任感とか使命感とかが非常になくなつてしまつた。

福音を受けた方々は是非とも、我々は

「日本人である」

ということと、

「キリストの僕である」

ということを自覚してください。これは離することができない。内村先生が、

「二つの」を愛する」

「ジーザスとジャパンを愛する」

と言つた。内村先生は本当の愛国者です。「愛国」という言葉を言うと、すぐ何か軍国主義みたいに思うけれども、とんでもないはなしだ。民族はそれぞれ使命があるから、その使命において国を愛するということは、神さまから課せられたところの課題であり責任であるわけです。そういうのが本当の世界市民になる。いわゆるコスモポリタンではない。また、いわゆるマイホーム主義でもない。

聖霊の事態は主観的なものでは絶対にない。キリスト主体的なものです。だから、

「キリストの御霊われに臨めり」

ということをはつきりと受けとつていただきたいわけです。キリストの御霊は一遍臨んでおしまひではない。絶えず新たに臨む。朝ご飯を食べて、それでもうお終いですか。またお昼ご飯を食べるでしょ。魂もいつも新たに食べていかななくてはいいかん。

「我を食べる、我を飲め」



とキリストは言われた。断食は、こらえたり修行するためにするのではない。キリストを食べるために、ご飯を食べないだけのはなしだ。キリストはご飯よりもつとおいしい。

「我を食らえ、我を飲め」

と仰ったのだから、祈りの世界でキリストを飲み、キリストを食べていけば、あとは水を飲んでいればいい。滝浴びは、聖霊の滝を浴びる。

「聖霊の滝のごとく」

というが、

「聖霊の滝のごとく」

という言葉もある。そのように、滝浴びの姿は聖霊を受けるという境地でやる。内容はすべて積極的なことです。それは本当に福の音信よろこびおとずれなんです。

「歓喜の音信を汝らに与える」

とキリストは言われた。今日の題の「歓喜の油」の油とは聖霊のことです。

● 霊が貧しい

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて

「膏注がれたる者」

とは

「メシヤ」「キリスト」

です。御霊という膏の注がれていないクリスチャンがたくさんある。それをレッテル・クリスチャン、観念クリスチャンという。頭のキリスト教がたくさんある。それは頭と心くらいだ。

貧しきものに福音をのべ伝うことをゆだね、

この言葉は何か躓きにならないですか、

「では、富める者には福音をくれないのか」

なんて、イザヤさんにちよつと文句を言いたい。私に言わせると、

「福音を伝えて貧しくする」

ということ。魂を貧しくする。福音を伝えると、魂が貧しくされる。

「幸いなるかな、貧しき者。天国はその人のものなり」

とキリストは言われた。キリスト自身が霊の貧しきひとであった。自分を何ものともしないということが「霊が貧しい」ということです。神の子キリストが自分を何ものともしなかったのに、我々が自分を何ものかにしてどうするんですか。

皆さん、まだ自分を何かと思っていますか。バーツと自分を本当にすつ飛ばして、そんなものは問題でない、というところに本当に来ませんか。どうも、現代人は自意識過剰だね。キリストは、



「自分は何もできない、何も言えない。なぜ、私を善いと言うか」と徹底的に自己を否定している。観念で否定しているのではない。本当に現実にそうしている。

私たちはそれになかなか成れないものだから、それでも何か自分を惜しんでいるから、自分を惜しんでいるその我執というものをキリストは十字架につけてしまった。やむを得ずして、キリストは十字架に架かった。イエスは、好んで十字架に架かったのではない。いきなり天界に行きたかった。彼は無きものだから、神さまの無限無量の霊でもって、いきなり天界へスーッと、エリヤよりもエノクよりも素晴らしく、キリストは天界へ行けたんだ。そのキリストが十字架に架かって

「復活したかしたかったか」

なんて、何をぬかすかと言いたい。復活どころの騒ぎではない。本来、神さまからいただいた永遠の生命をもったひとです。

「我を受けとる者は死すとも死なず」

と、キリストは仰った。ああいう言葉は本当に受けとってください。キリストは、

「わが言は霊なり生命なり」

と仰った。聖書の言葉は観念や意味ではない。聖書研究家は、

「この意味はどうだこうだ」

なんて言って、何かこわばって、終いにはパリサイになってしまふ。本当の学問は学に絶する絶学の学です。何でもそうです。絶するところに来なければ本当のところにはいかない。棟方志功は、

「絵が絵を書いている。自分が書いているのではない」

なんて言っている。

本当に福音が伝わってくると、もう福音の他は何も要らなくなってしまうから、霊が貧しくなってしまう。これは「貧しき者に福音を伝え…」ではない。

「福音を伝えて貧しくしてやるぞ。そうすると、これが無限無量となり、本当の豊かさになるぞ」

ということ。逆なんです、真理はそのような逆説的な消息です。

空気は見えない。見えないけれども、充滿している。この空気みたいなすがたです。無けれども、これほど有るものはない。

●キリストの碎けを賜る

貧しく、自分を本当に碎け切ってしまった、そういうところに神の霊がくることは、イザヤ書57章15節に出ている。

「至高^{いと}至上なる永遠にすめるもの、聖者^{せいじや}となずくるもの如此^{せいじや}いい給う、



至高にして永遠なる聖者は、時間を超えて永遠であり、空間的には最高のところにいます。

我はたかき所きよき所にすみ、亦こころ碎けてへりくだる者とともにすみ、

謙^{へりく}だるものの霊をいかし、碎けたるものの心をいかす。」(イザヤ57・15)

「こころ碎けて」の「こころ」は本当は要らない。詩篇51篇の碎けの魂です。碎かれたる魂です。低くされた霊です。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

という。みな相通ずるものがある。そこに神さまの霊がやってくる。驕^{おご}れるところには来ない。驕れるところにやつてくるのはサタンの霊です。

「驕る者久しからず」

というが、これは困ったものだ。驕り高ぶった者、自己を何者かとしてしていると、これはサタンです。

私たちは碎けきらない。私たちの碎けなんてものは相対的なものだ。そこで、十字架の碎けは絶対的な碎けだから、十字架の碎けをたまわ^{たまわ}るんです。

「なかなか、無となれません、碎けません」

なんて言う人が時々あるけれども、それは碎けないよ。私たちは碎けないし、無となれない。その通りです。キリストの碎けを私たちに無条件でくださっているのだから、無条件で受けとつたらい。相対的な波はいくらあつたつていい。そんなものは気にしなくていいから、本当の奥のキリストの碎けを賜る。

だから、静かに深く祈りなさい。一番深い祈りは沈黙の祈りです。

「汝らの呼ばざる先に我は答え、語り終わらざる先に我は聞いている」

とある。呼ばざる声を神さまは、キリストは聞いている。語らざる言葉をキリストは聞いている、受けとつている。沈黙の雄叫びという。若い人は大きな声で叫んで祈つたつていいよ。けれども、沈黙の雄叫びはそれよりも強い。本当に平伏していなかったらダメです、魂が平伏しの受けとりで行かないと。

今のイザヤ書57章15節のように、最高の神は最低のところ而降臨したもう。そこが即ち既に天国なんです。そうなつてくると、どのような時も行き詰まりを知らない。皆さん、電車の中であろうとどこであろうと、

「今ここにキリストはいます」

ということになりますから。

●愛への自由

イザヤ書61章に戻ります。

「……我をつかわして心の傷^{いた}める者をいやし、

「心の傷^{いた}める」は英語で「ブラウクン・ハート」、破れた心です。ヘブライ語では「傷^{いた}める」



よりもつと強い言葉です。

俘囚にゆるしをつけ縛められたるものに解放をつけ、

同じ事態を別な表現で言っている。自由、解放です。

「捕らわれ人に自由を告げる」

とはもちろん具体的な捕囚のことを言っている。これはバビロニア捕囚の後の音信ですから。

パウロは始めは自分を自由だと思っていた。ユダヤ教に熱心だから、魂は非常に驕り高ぶって、自由だと思っていた。ところが、キリストにひっくり返されて、今度はキリストの捕らわれ人となった。

「我はキリストの囚人である」

と書翰の中で言っている。キリストにとつ捕まって、捕らわれてしまったと思ったら、今度は逆にこれは本当の自由だったということになる。キリストの捕らわれ人となれば、本当の自由がくる。それはキリストが既にちゃんとなさった。キリストは神の捕らわれ人なんだ。神さまに完全に彼は捕らわれてしまった。ざるを得ない世界です。

「神の言葉に従わざるを得ない。神の力を、神の言葉を受けざるを得ない」

といって、完全に神におけるところの必然の世界に入った。これを天的必然という。天的必然が本当の自由である。この消息を言っているのが、マルチン・ルター『キリスト者の自由について』です。これはあの親鸞の『歎異抄』に相応えるような西の方の名著です。パウロがガラテヤ書 5 章、コリント後書 3 章で言っている自由です。

「御霊のあるところに自由あり。」(コリント後 3・17)

「キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ちて

再び奴隷の轡に繋がるな。」(ガラテヤ 5・1)

とある。「自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり」は、

「釈き放して自由を得させてくれた」

というように逆に訳したって構いません。これは我執から、罪から解放したことです。

罪からの自由から、今度は愛への自由になる。これは積極的な自由です。愛への自由ということとは、人を助け救うところの自由です。自由の主体は聖霊ですから、その自由はもちろん力をもっている。聖霊のないところに自由なんかない。

「十字架で罪から解放された」

と。それだけではまだいけない。「罪から解放された」ということはまだ消極的な自由なんです。積極的な自由は、本当に十字架を受けとれば、そこに聖霊が必ずやつてくる。十字架と聖霊は離すことができない。自由の積極的な内容は聖霊が与えるもので、自由の消極的な内容は十字架が与えるものです。普通はみな十字架でお終いになっている。

「十字架で贖われた。ああ、自由だ、自由だ」



と言って、それでお終いになっている。この自由がもの凄い内容の、無限無量の内容をもったところの自由ということは、聖霊がこなければ分らない。キリストは、その意味において、天衣無縫であります。

● 歓喜の油

このイザヤ書のところではもちろん具体的な歴史的な内容の事を言っている。

2 エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀む

ものをなぐさめ、³ 灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、

悲哀にかえ、⁴ 歓喜にあぶらを予え、

これが表題にした「歓喜の油」です。人生はいろいろな悲しみや苦しみや悩みがあるから、

「人生は悩みの谷、涙の谷」

とか言う。私は天界においても涙はあると思う。歓喜の涙、感激の涙はやはり天界になくしては困る。本当の意味における人間性のないような世界は私は嫌だ。キリストという方は非常に人間性の豊かな方ですから、間違えては困る。

人間は何といつても、喜びを自然に求めている。けれども、本当はこれは求めているわけではない。喜びが結果としてあふれてこなければ。快楽を求めているような快楽主義はダメです。本当のところを歩いていると、それが本当の快楽であり、本当の喜びであるというのが本当の快楽主義なんです。快楽主義なんていう言葉は躓きになるけれども。幸福もそうです。ヒルティ―は『幸福論』を書いたが、ヒルティ―は幸福を求めている幸福論を言っているのではない。

「本当の福音を受けとつていけば、それが本当の幸いの道だ」

というのがあの『幸福論』なんです。だから、間違えては困る。幸福を求めると、これはいわゆる幸福主義になつて、いけません。

「恵福なるかな……」

というのは、福音を本当に受けとつていけば、そこから恵福^{さいわい}という事態がこぼれてくる、^{よろこび} 歓喜が自ずからそこにわいてくる、ということ。それが歓喜の音信^{おとずれ}、歓喜の油ということ。油自身が、聖霊が喜びを自然にもたらす。聖霊というのは喜びや光や愛やいろいろなものをもたらす。これはみなそこからこぼれてくるものです。大事なのは聖霊自身です。だから、現象は自由自在になる。この現象を求めている。現象を求めていると、御利益主義になる。

福音というのは簡単なんです。我々は、求めてよいのは唯だ一つある。それはキリストだけ。キリストという神さまの結晶体、神さまのダイヤモンド、これだけは無条件にいくら追求してもいい。キリストを求めていると、その中からやってくるのはこの油、聖霊です。キリストと聖霊、その他はもう何も要らん。そうしたら、後は派生するものがそこから自



然にこぼれてくる。そこから今度は求めれば、この求めはもう御利益でなくなる。だから、先ずキリストの中に祈り入ってください。それから、お願いしてごらんさい。それは我欲でないお願いになってくる。神の栄光の現れとしてお願いすることに自然になってくる。それは祝福される。キリストを本当に受けとつてからならば、ある人は

「私は大いに学問をやります」

というなら、大いにやってください。学問、芸術、事業、医療、何でもいい。もう自己中心でない求めになるからです。自己中心になっている求めだったらダメです。自己中心になっていろいろなものを祈つたつてダメなんだ、それはみな御利益だから。

●神さまを楽しむ

キリストを求めていると、霊が貧しくされる。そして、キリストの中に入ろうとしたら、それは十字架という門だった。キリストは、

「我は門なり」

と仰った。これは十字架・聖霊です。

この油は、平安の油と言おうが、歓喜の油、愛の油、義の油と言おうが、一向差し支えない。油即ち聖霊がもっているところの内容はたくさんある。

「歓喜の油と平安の油はどう違うんですか」

なんて、バカな質問をしたらダメですよ。油さえ本ものであったら、それが歓喜になったり、平安になったり、愛になったり、義になったりする。

聖霊は無色透明の水滴みたいなものです。これに太陽の光が通過すると虹になる。雨後に虹が出るでしょ。これは水滴が空に漂っているから、それがいろいろな色に光る。

うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹、エ

ホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。

「義の樹」というのは「テレヒント」という木です。イスラエルに行くとアブラハムの櫨の木があるが、あれです。

¹⁰ われエホバを大いによろこび、わが靈魂^{たましひ}はわが神をたのしまん。そは我にすくいの衣をきせ義の^{うわぎ}外服をまとわせて、新^{にいむこ}郎が冠をいただき新婦^{にいよめ}が玉こがねの飾りをつくるが如くなしたまえばなり。

「大いによろこび」と訳してあるが、ヘブライ語の言い方では「よろこびよろこぶ」と書いてある。エホバを喜び楽しむというわけです。イザヤ書58章にも、

「¹³ もし安息日になんじの歩行^{あゆみ}をとどめ、我が聖日になんじの好むわざをおこなわず、安息日をとなくて樂日^{たのしみ}となし、エホバの聖日をとなくて尊むべき日となし、之をとうとみて己が道をおこなわず、おのが好むわざをなさず己が言を語らずば、¹⁴ その時なんじエホバを楽しむべし。エホバなんじを地のた



かき処にのらしめ、なんじが先祖ヤコブの産業をもて汝をやしない給わん。

こはエホバ^{みくち}口より語りたまえるなり。」(イザヤ58・13・14)

ここにも「エホバを楽しむ」とある。

「神さまを楽しむ」

という大変愉快な言い方をしている。この「楽しむ」という字は小さな子がお母さんに甘えて楽しむような時にもこの同じ字を使う。

人間は楽しいことが好きなんだ。けれども、これは楽しまんがための楽しみではなくて、「神さまはうれしくてしょうがない、楽しくてしょうがない」

という意味の楽しさです。だから、大いに讚美し、大いに歌う。踊ったって構わない。踊る宗教なんてのがあってもいい。心が楽しいのは、健康にもいい。憂えたり心配したり思い煩っている、ご飯はおいしくないし、肉体的にもダメになってくる。だから、魂や心が楽しむということは、神さまが一番喜びたもう自然の姿なんだ。神さまを楽しむということは、神さまの歓喜の霊がくるから、本当に楽しく、大讚美となるわけです。

天気でも曇ったりすると、気が少しおかしくなったりする。けれども、そんなことはない。曇りの時は曇りになり、晴れたら晴となる。それだけの自由な気持になったら、今度は逆に曇りが曇りでなくなる。船に酔う人は、波ごころにならなければ酔ってしまうよ。波と同じように自分が波となる。柔軟な魂とならなければ。雨を見れば雨となる。嫌だと思わない。喜びの世界というのはそうなんです。イザヤ58章13節に、

「安息日を楽しむの日とする」

と書いてある。私たちは日曜日は、ただボヤツとしているのでも、ただ眠っているのでも、遊びに行くのでもない。少なくとも日曜日の午前は絶対に――守るとい言葉は私は嫌いだけれども――集会に行かざるを得ない、集まりをせざるを得ないということです。というのは、オアシスみたいに神さまを楽しむ。そして、復活のキリストの力をいただくわけです。キリストの力を得て、一週間の原動力をいただく。安息日は、こういった力を得て、本当に歓喜の魂となるためです。

日曜日は本当は全日、仕事をしない。私は学生時代から日曜日は勉強しなかった。翌日が試験であっても、月曜日の午前3時頃に起きて勉強した。内村先生がそれをやったから、私はそれを実行した。別にそれで落第しなかった。逆に六日間の勉強に迫力がついてくる。

私の一生は兄貴の弔い合戦です。だから、使命を果たすまで簡単に死ぬわけにいかん。これからが本格的なんだ。今までは序幕です。77歳で序幕なんだから、あなた方はまだ20歳くらいで本当にうらやましい。あなた方は70歳くらいになったら、光ってしまっただけでなくなってしまうのではないかな。写真を取ったら映りませんなんていう人が出てきたりね(笑)。キリストは変貌の山でまっ白に光ってしまった。いや、大変なんですよ、聖書の現実。呑気な顔して読める世界ではない。だから、皆さん、これでいいなんていうとこ



ろは絶対にありませんから、満たされつつ、いよいよ求めていくわけです。

●女性道即男性道

10 われエホバを大いによろこび、わが靈魂^{たましひ}はわが神をたのしまん。そは我にすくい^にの衣をきせ義^{うわぎ}の^{にいむこ}外服^{にいよめ}をまとわせて、新郎が冠^にをいただき新婦^{にいよめ}が玉こがねの飾をつくるが如くなしたまえばなり。

「すくい^{うわぎ}の衣、義^{うわぎ}の外服^{うわぎ}」と具体的な言い方をしているが、要するに

「救と義」

です。「新郎と新婦」、夫と妻、天と地、神と人、キリストと召団。どれをあなた方は思ったつていい。けれども、今一番具体的に申し上げようとしているのは、

「キリストと召団」

です。エホバの神とイスラエル民族を夫と妻の関係にしたのが預言者ホセアです。イザヤもそれでここに書いてあるわけです。パウロが

「キリストと教会(エクレシア)」

ということを言いだした。もうひとつ言うと、
「神とキリスト」
です。

この頃は、教会の結婚式^{ウエディング}の文句を聞いていると、「妻は夫に従いて」という文句だけを省いてしまっている。

「民主主義だから従う必要はない、同等なんだ」

ということか何かは知らんけれども、あれは間違いだ。神さまに対する人格的な存在として、あるいは社会的存在としての男女平等^{ジェンダー平等}ということは、それはそうです。人格は同じです。大臣も乞食も、男も女も、何もないということはパウロも言っている。けれども、もうひとつのはつきりとした秩序はちゃんとある。主従、

「主と僕」

ということです。男性の務めと女性の務めは本質的に違う。身体の構造も違う。神さまはそういうように造ったのだから。それを人間的な妙な平等は困る。社会的な問題のことは別問題ですけども。それだつて本当はちよつと無理がある。

キリストは非常に結婚を祝福されました。要するに、それは存在的なそれぞれの本質と使命がある。でなければ、神さまは男と女に造らないわけです。本質と使命が違う。そして、これは本当に協力して一つになる。

「人独りなるはよからず」

というわけで、アダム・イブの創造のところは神話だけれども、非常にうがっています。

「アダムの肋骨から女を造った」



ということは心臓の所からというようなわけで、なかなかうたったものがある。

とにかく、これが二にして一つなんだ。法則がちゃんとある。生命的な、あるいは宇宙構造的な法則がある。人格的にも確かにそれは二にして一つです。男も女も、本当に男性らしく、本当に女性らしいときに、それがどちらも本当に人間らしい。本当の人間らしさというのはそれぞれのそれらしさが本当であるときに、共通な人間らしさというものが出てくる。男性道と女性道は実は一つなんです。山上の大告白のキリストの言葉は女性道です、みな受け身です。

「恵福^{さいわい}なるかな、霊の貧しき者」

とある。我が無いのでしょ。あるドイツ語の本に、

「女性というものは我というものが無い」

と書いてあった。無我の境地です。それは完全に受け身の境地なんです。神・キリストに対して本当に受け身であるのが信仰の極意なんです。キリストは完全に女性道を行っている。

「汝の御意を成させたまえ」

と言って、自分の意志を棄てている。そして、神さまに完全に従っている。完全に従っていると、今度は逆に、そこに自由と力がくる。それが男性道になる。本当の世界は女性道、即ち男性道と言える。キリストが本当に神に従ったら、キリストは最大の英雄であった。いかなる英雄もキリストにはかなわない。ナポレオンもキリストにはかぶとを脱いだ。

いわゆる英雄は本当の女性道を行ったキリストにはかなわない。これが本当の男性道です。男性道と女性道は、神において一つになる。その現れ方が、女性として現れ、男性として現れているだけのことはなしです。それが本当の人間道です。永遠に女性的なる者、永遠に男性的なる者、永遠に人間的なる者、これは神・キリストを中心にするときにみな一つになる。

●「汝はわが骨の骨、わが肉の肉」

あなた方は、一人ひとりの顔がみな違う。これはありがたいことです。人格というのはみんな違う。人格というのは代用がきかない。顔が違うように一人ひとりの個性はみな違う。指紋までちがう。だから、

「神さまは最大の芸術家だ」

と私は言っている。同じ作品はできない。また、造らない。それが大調和をなす。自然界を見たって、そうです。動物や昆虫やなんかをよくテレビでやっているが、どうしてもこんないろいろなものができているのかと本当に不思議だ。「なぜ」と聞いたら分からない。

「いこういこうとべんちます」

と言うより仕方がない。科学の世界では、「なぜ」は分からない。



「なぜ」

は神さまだけが知っている。ある程度までは因果法則は分かりますけれども、もうひとつ奥をたずねると分からなくなる。すべて不思議ならざるは無しです。人間の理解なんてものはたかが知れています。そのまま信じ受けとり、そのまま本当に見入り、そのまま聞き入る人が――だから、実は芸術家が――一番深い真理を掴んでいるといえる。真理の最高の表現はやはりドラマだ。その点でやはりシェークスピアなんてのは凄い。

「こひつじ 羔羊の婚姻」

という言葉がある。キリストは羔羊で、我々はエクレシア(召団)です。私たちのエクレシア(召団)というものは

「聖霊のエクレシア」

なんです。

「キリストのエクレシア」

となると、キリストが全世界のいろいろな教会を全部掌握してらっしゃるのがキリストのエクレシアです。最後には

「神のエクレシア」「神の幕屋」

になる。

神さまがアダムのためにエバを創ってくれたときに、アダムはエバに何と言いましたか。

「汝はわが骨の骨、わが肉の肉」

と言った。これは名言だ。アダムの肋骨をとってエバを造ったから、

「本当に私とお前とは一つだよ」

というわけです。これが旧約の最初の詩なんです。アダムがエバに、男が女に言いました。キリストは私たちの召団、私たち一人ひとりに対して、

「汝はわが骨の骨、肉の肉なり」

と言っておられる。私たち一人ひとりにキリストが、

「お前はわが骨の骨、肉の肉。永遠の朽ちざるところの骨だぞ、朽ちざる身体だぞ、

霊体であるぞ」

と言っておられるんです。そのようにして、この肉体の奥にキリストの霊体が形成されつつある。私はたまらんです、そのようにしてキリストから生かされているかと思うと。

断食するなら、そのキリストの生命をいただく断食なら大いにやってください。我慢の断食ではダメだ。それは本当に楽しい。水を飲むときにも、聖霊を飲むつもりで飲んだらいい。何でもそうです。私は讃美歌を歌う時に、時々ものに寄り掛かって歌う。これはキリストに寄り掛かっているつもりなんだ。

「先生はくたびれているのか」

なんて、そうじゃない。私はくたびれは知らない。バカみたいだね、私は。お伽話の国み



たいだ。皆さん、もう少しお伽話になってくださいよ、あなた方はあまり現実すぎる。今の小さい人が夢を知らないで困る。変てこな、どぎついような漫画やテレビは、倒したりぶつ壊したり、もう大間違いだ。コマースリズムがいかに小さな人たちの心を傷めて曲げているか。日本はこんなことをしていたら、本当におかしな国になるよ、滅びに向かっている。昔の本当の美しいお伽話の国を、世界の一流の文学をもつと読ませた方がいい。漫画なんかみな棄ててしまえ。

「漫画を読んでいなければ話し合いができない」

なんて。いいよ、話し合いができなくなつて。

「何人でも相手になつてやるから」

というような、それくらいの子供をつくつてください。そういう気持でひとつやってください。あなた方自身が本当の教育者ですから。

今の青年は吉田松陰や佐久間象山の、幕末の頃のあの志士たちの姿を少し学んだらいい。あそこらの歴史をしつかり読んでください。キリストの光で読むと、それが全部、身になる。

「あれは福音でないから…」

なんて、そんなケチな根性ではダメだ。キリストの福音はおよそ偽りでないものは全部消化してしまいますから。私は食物は何でも食べるからね、好き嫌いが無い。

私たちは、

「汝はわが骨の骨、肉の肉」

とキリストに言われているような存在になる。また逆に、私たちはキリストに、

「あなたは私の骨の骨、肉の肉です」

と、今度は逆に申し上げる。

「あなたは観念ではない。だから『我を食え、我を飲め』と仰ったあなたを食べます」

と言う。これは霊の世界、御霊の世界、祈りの世界です。

だから、力が来る。私は按手するときに、完全にキリストの中に入つて、やっているんですよ。「お願いします」なんて、そんなことで按手しているのではない。自分を本当にキリストの中に入れなければ按手してはいかん。自分をキリストの中に入れると、そこからグーッと伝わる。それはキリストの無者だから。無者にされているから、無限無量なものがあるからありがたくてしょうがない。みんな、キリストがなさるのであつて、私がするのではない。これは楽しい。これが「歓喜の油」なんです。人を喜ばす油、喜ばしの油です。

●心臓が太陽となれ

今度はイザヤ書62章に入ります。

「われシオンの義あさ日の光輝かがやきのごとくにいで、エルサレムの救いもゆる



松火のごとくになるまではシオンのために黙さずエルサレムのために休まざるべし。

素晴らしい句だ。これも義と救いでしようが。ここは非常に輝かしいところでイザヤ書60章と似ている。

「起きよ、光を発て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照出たればなり。」(イザヤ60・1)

エルサレムが回復して、これからまた新しい希望だという。エホバの光が、神さまの光が、栄光が――「光」も「栄光」も同じことを別な言葉で言っている――お前の上に照ってきたと。日本は太陽神です。あまてらすおおみかみ天照大神です。日本の国旗は日の丸です。これは世界最高の国旗です。

「崇高なる単純さ」

という。日本の民族くらい、国旗をいい加減にしている国民はない。情けないはなしだ。

「心に太陽をもて」

というが、即ち、

「私たちの心臓が太陽となれ」

ということ。「汝の上に照り出でる」ではなくて、

「キリストの義の光がうちに、キリストという光が汝の中に入って照る」

ということ。法然は、煩惱が身体の影のようにどうしても取れないので苦しんで、それで

「南無阿弥陀仏」

になった。「阿弥陀」――無量寿無量光――の中に「南無」すれば、自分が帰入すれば、内側に光がくるから、今度は影がなくなる。外から光られていると影ができる。けれども、この中に光がくると、影がなくなってしまうわけです。

キリストの福音はその世界を与えてくれる。キリストという光が入ってくる。

「汝らは世の光なり」

とは、

「私がお前の中に入って、光となるぞ」

ということです。

ものは全部、客観的にみていたらダメです。キリストを自分の中に入れる。

「わがうちにキリストあり」

ということですよ。パウロもペテロもヨハネもその世界に入ったから、凄いことになった。だから、日本の国旗は、私たち自身が国旗になればいい。「白」は無でしょ。無色透明ということ。

「キリストの無者となった。無者となったら、キリストという太陽が中に入った」というわけだ。国旗が私たちの本当の信仰的実存を表しているわけです。

旗は破れていたっていいよ、少しくらい穴が開いていたって一向差し支えない。どうせ



みな破れているんだ、破れ器だ。破れないと思つたら大間違いだ。問題は、「ここにキリストがあるか、御霊が来ているか」ということだけなんです。そうしたら、

「わが骨の骨、肉の肉」

というように全部、本当にものになってしまふ。だから、人の思いにすぐるところの力がくる、生命がくる。私は77歳なんていう歳を忘れている。あなた方、絶対に聖霊の生命の証人になってください。

「シオンの義」とはキリストの義ということ。日本の義が朝日のごとく輝くことはちよつと無理だね、本当はそうなんだけれども。民族神、天照大神を持つているのだから。それをもつて象徴される――もつと次元的に超えてしまつて――キリストという大神を、義の太陽を、愛の光を持つている。だから、はつきり福音的に受けとれる。それが朝日の如く輝く。我々自身が本当に日本の光でござると。日蓮は

「我は日本の柱」

と言つたではないですか。自信ならざる自信がくるわけです。

聖霊が来たら、思いを超えた素晴らしいことが起きてくるから、皆さん、どしどし体験してください。私も正直、そうだ。どうして、本来弱虫な私がこんなことになつてしまつたかと思うと、聖霊以前のことからはとても考えられない。なにも力んでゐるわけではない。あなた方は日本の輝く、燃える松明です。そして、火を灯していつってください。私は『靈灯万里』（小池辰雄著作集第8巻『詩歌集』90頁 二、警世詩集「靈灯万里」という詩を書いたでしょ。あれを実現してください。

●歓喜の内容は聖霊

²もろもろの国はなんじの義を見、もろもろの王はみななんじの榮をみん。斯てなんじはエホバの口にて定め給う新しき名をもて称えらるべし。³また汝はうるわしき冠のごとくエホバの手にあり。王の冕のごとくなんじの神のたなごころにあらん。⁴人ふたび汝をすてられたる者といわず、再びなんじの地をあれたる者といわじ。却てなんじをヘフジバ（わが悦ぶところ）となえ、なんじの地をベウラ（配偶）となうべし。そはエホバなんじをよろこびたもう。なんじの地は配偶をえん。

「ヘフジバ」とは「彼女においてわが悦びあり」という字です。「ベウラ」とは「結婚、配偶」という字です。

⁵わかきものの処女をめとる如くなんじの子輩はなんじを娶らん。新郎の新婦をよろこぶごとくなんじの神なんじを喜びたもうべし。

婚姻の悦びに例えて、さんざん書いてある。神さまがイスラエルを欣ぶことかくの如しと。



私たちはまた、

「キリストに喜ばれることかくの如し。また、キリストを飲ぶことかくの如し」ということです。その歓喜の内容は聖霊であるということです。聖霊がなければ、この悦びは本当にやってこない。聖霊が結ぶんです。

10 門より進みゆけ、民の途をそなえ土をもりて大路をもうけよ。石をとり
のぞけ、もろもろの民に旗をあげて示せ。

時々、「旗」という字が出てくる。私たちの旗印は十字架・聖霊(○の中に十の印)です。十字架・聖霊の旗をあげて進んで行く。ここはもちろんバビロニアの捕囚から帰るときのことと言っているだけの話ですが、旧約の解放された事態を福音の角度から私たちは今読んだわけです。

11 エホバ地の極にまで告げてのたまわく、汝等シオンの女にいえ、視よなん
じの救いきたる。視よ主の手にその恩賜あり、はたらきの価はその前にあり。
12 而してかれらはきよき民またエホバにあがなわれたる者となえられん。
なんじは人にもとめ尋ねらるるもの棄てられざる邑となえられん。

「かれらはきよき民またエホバにあがなわれたる者となえられん」

という句はちよつと気をつけてください。「聖き民」という言葉と「エホバに贖われたる者」という言葉が同じである。「贖われた」ることが即ち「聖き」「聖とせられた」という意味です。贖われたる者、これが聖徒です。「聖徒」は「贖われたる者」と同義である。

私たちはキリストの聖をいただいた者で、私たちが聖なるものでは絶対にならない。私たちは罪びとにすぎない。よく、カトリックでは「聖者」なんてやるけれども、ああいうやり方はちよつとどうかと思う。イザヤ書60章15節に、

「15 なんじ前にはすてられ憎まれてその中をすぐる者なかりしが、今はわれ汝
をとこしえの華美よの歡喜となさん。」

とある。どんなに彼らがバビロニアの捕囚から帰ってきたことが本当にうれしかったかは、第三イザヤのこれらの消息でもって分かる。

16 なんじ亦もろもろの国の乳をすい、王たちの乳房をすい、而して我エホバ
なんじの救主なんじの贖主ヤコブの全能者なるを知るべし。」(イザヤ60・15
16)

「救主」「贖主」「全能者」と、畳みかけて言っている。「王たちの乳房をすい」と、妙な言い方をしている。これはもちろん象徴的な言い方です。この「乳」という言い方は、相手において現れているところの神さまの恵みにあずかるということです。

● 汝の御意にこれ従う

婚姻のことで、面白い例があるから、ちよつとお話しましょう。これは支那の話です。



支那の戦国時代の末期のことです。齊せいの国の湣王びんおうがある日、家来をつれて都の外を歩いていた。王様が来たというので、お百姓さんたちが道端に土下座をしてお迎えしていた。そこに宿瘤しゅくりゅうという少女がいて、これは王様にお辞儀をしない。

「お前はなぜ私に挨拶をしないか」

と王様が聞いた。

「私は親から桑を摘むことを命ぜられて、やっているの、王様を拝めとは命ぜられていませんから拝まないのです」

とその少女は答えた。これは不思議なものだと王様は思つて、

「お前は首にコブがあつて、惜しいことだね」

と言つた。少女は言うのに、

「私は親の言いつけを一心に守つていればいいので、他の人に別に心を煩わす必要はないので、コブがあろうがなかりうが、そんなことは気にしてません」

王様は、これはなかなか魂が偉い娘だと驚いて、

「お前は車に乗つて一緒に来ないか」

と言つた。少女は、

「私には親がいて、そのお許しが必要なければ、すぐ行くわけにはいきません」

とはねつけてしまつた。数日たつて、使いがやつてきて、王宮に来いという。親は非常に恐れて、美しい着物を着せてやろうとした。そうしたら、その少女は、

「そんなものはいりません。私が王様に会つたときには、この通りの姿をしていたので、このまま行きます」

と。それで、桑を摘む同じ姿で彼女は出かけて行つた。王様はその少女の魂に感激して、とうとうこれを妃にしてみました。そして、妃は今度は王様の言うことをしつかり聞く。非常に内助の功があつたので、その当時、秦の国が強かつたのだけれども、この齊に対しては一目をおいて攻めてこなかつたという話です。

そういうようなことで、人間の魂の在り方というものがいかに大事なことかということ。しかも、これはコブのあるお妃です。この王様も王様ですけれども。そういう王侯となつたと書いてある。そういう話がありましたが、我々がキリストに対するところの信義というものが、このシユクリユウに及んでいるかどうかということ。です。

「汝の御意にこれ従う」

ということにおいては、なにものも恐れずに従う。我々は何をしていても、そこにおいてキリストを証しすることが大事なわけです。

「我は実存主、始なり終なり。汝ら是我が証人なり」

と私は書いた。我々は始めから終りに至るまで、人生の終局に至るまで、キリストというアルファ・オメガを証していくことが我々の使命である。それが本当に「羔羊の婚姻」の



一員となる姿です。黙示録の最後に言われているところの事態です。

●(参考)「宿瘤採桑」のあらすじ

ある日、斉の潛王^{びんおう}が家来や立派な馬車を連れて、東郭^{とうかく}という町^{ぎやうこう}へ行幸(お出かけ)しました。きらびやかな王の一行を一目見ようと、町中の人々が仕事を放り出して沿道に集まり、ひざまずいて見入っていました。しかし、道の脇で桑の葉を摘んでいた一人の少女(宿瘤)だけは、王の一行に目もくれず、黙々と作業を続けています。不思議に思った潛王は、馬車を止めさせて彼女に尋ねました。

「私の乗る馬車や家来たちがこれほど大勢通りかかり、誰もが手を止めて見ているというのに、なぜお前は一瞥もしないのだ?」

少女は落ち着いてこう答えます。

「私は両親から、桑を摘むようにと言われてここへ来ております。王様を拝見するようにとは言いつかっておりません。」

潛王は「なんと面白い、賢い娘だ」と感心しましたが、彼女の首にある大きなこぶが目に留まり、

「ただ、これほど奇特な女子なのに、首に大きなこぶがあるのが惜しいな」と口にしました。すると少女はこう返しました。

「私のような身分の低い者の務めは、親の教えを忘れず、心を変えないことです。

その一途な心さえあれば、首のこぶが何の手妨げになりましようか。」

彼女の「見かけに惑わされず、自らの本分を尽くす」という堂々とした態度に、潛王はすっかり心を奪われてしまいました。「これこそ本物の賢女だ!」と感激した潛王は、彼女をそのまま王宮へ連れ帰ろうと、お供の馬車に乗るよう促します。しかし、宿瘤はこれも拒みます。

「王様の権威があるとはいえ、私には家に両親^{しほん}がおります。親の許しも得ずにそのまま王様について行けば、それはただの『私奔^{しほん}(駆け落ち・不道德な密通)』になっ
てしまいます。そのような不義を働く女を、王様はどうしてお側にお置きになれるでしょうか」

潛王は自分の軽率さを大いに恥じ、「私が間違っていた」と謝罪しました。そして、正式な礼を尽くした使者を彼女の実家へと送り、厳かな儀式を経て、彼女を妃(のちに王后)として迎え入れたのです。

王宮に入った宿瘤は、贅沢な暮らしに染まることなく、質素儉約を貫いて宮中の女性たちの模範となりました。潛王に対しても物怖じせず、政治の過ちを厳しく諫めたため、斉の国は大いに引き締まったといえます。

しかし残念なことに、彼女が若くして亡くなると、潛王を諫める者がいなくなってしまうしました。その後、潛王は傲慢な政治を行うようになり、周辺諸国(燕など)の激しい反撃を食らって、最終的には国を滅亡寸前まで追い込み、自身も悲惨な最期を遂げることになります。

